
雨ノ日

まなつか

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨ノ日

【Nコード】

N46830

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

俺は女子が大嫌いだ。——そんなことを言うのは杉山健二。中学二年生だ。

だけど、そんな彼が一人の少女に想いを寄せる……。

前編

「初めまして。杉山健二です。趣味はギャルゲです。好きなモノは女の子です。よろしく」

僕は新学期早々自己紹介でそう言った。クラス全体が引いていくのがわかる。

男子はうわぁ……こいつ……とささやいている。

女子は何こいつきも。と騒いでいる。

「……計画通り」

俺はそう言う自分の席についた。そしてふうとため息を軽くつく。

なぜ、こんなことを言ったのか。俺はもともとギャルゲなんてしない。そして、女子は大嫌いだ。大嫌いだからこそ近づけないようにこんなことを言う。女子は、男子が近づいて行っていいものではない。清らかなんだ。

——勝手にそう信じていた。

「おい、お前。なんであんなことを言うんだよ。黙ってりやモテンのによー」

そのの次の休み時間になって去年からの悪友、山々順が話しかけてきた。

「いいんだ。これで」

俺は机の角に目をやりながらそう答えた。

「お前、去年あんなことがあったぐらいでへこむなよ」

「へこんでなんかない、ただ……」

「ただ……？」

「なんでもない。俺はもう恋なんてしない。勉強に専念するんだ」
口で言いつつもなんだか変な感じた。

「おお。そうかいそうかい。勝手にやっつけ。俺は早速女子にこえ

かけてくるぜ」

「そつちこそ勝手にやってろ」

「あはは。無理すんなよ」

そう言つて悪友は一番目に付く女子のグループに突っ込んで行つた。俺はそういうところだけ、男らしく思えた。そして彼は数秒後、しよぼくれた顔をして帰ってきた。

「俺も勉強するわ」

「ああ」

そんなことをしているうちに中学二年生、始めの日は終わつてしまった。

次の日

「ねえ、健二君。今日、勉強教えてくれない？」

クラスの女子の山風つて奴がやってきた。明らかに勉強が目的でないのがわかる。シャープペンシルさえ持ってきていないからだ。

それに昨日の自己紹介を聞いていなかったのか？ それと名前で気安く呼ぶな。俺はそんなことを思ったが、口には出さず適当に答えた。

「ああ、ごめん。今日俺塾だから」

「そつか……」

塾と言つのは本場で、俺は去年から塾に入っている。その甲斐あってか定期テストでは大体上位の方に入っている。だから名だけは一歩一人歩きをして、こうやって勉強教えてくださいとやってくる奴がいるのだ。

山々の話によると、大抵の女子は俺自体が目的らしい。迷惑な話だ。

「そつか。じゃあ明日は？」

明日は塾はない。どうしようかと一瞬迷つたが、昨日作つた自分のキャラ設定を思い出し――

「明日は……その……あ、ぎゃ、ギャルゲーをやるんだ」
——無理に答えた。

「へー！ 本当にやってるんだ！ イメージにあわないけど……」
不審そうな目を向けてきた。

「ははは……」

「なんてゲームやってるの？」

「え……？」

「答えられねエ——?! つか、一本も持ってねーし！」

「す、すくーるみずぎ大国かな……」

「聞いたことないけど……ブランドは？」

「ブランド……？」

服みたいだな。ってか今俺がつけた名前の奴にブランドなんてねえー！

「よ、よく憶えてないよ……」

「同人ゲーム？」

「ってか、なんで山風さんはそこまでそっちのことに詳しいの？」

俺がそう答えると彼女は俺から目をそらして何故か赤面しながらつぶやいた。

「だって……」

しかし、そう言つと黙りこんでしまった。

後日山々に聞いてみると奴曰く『好きな相手の好きなものに合わせんの基本だろ』だによ。

そうして、俺はクラスの女子に多々話しかけられるもなんとかかわし、4月を終えた。

「ぬはーっ。疲れたよ。俺」

「あはは……俺もだ」

目の前では全戦全敗の悪友が暗い顔をしていた。どんだけ振られたんだ？この一ヶ月で。

「ざつと30だぜ」

「ほぼ一クラス分じゃねーか!？」

あほだ。そこまで振られるならもう諦めればいいのに。

「今月は3階にいるやつに声をかけてくるぜ」

「いつてらー」

アホはほおっておいて、俺は英検の勉強に取り掛かった。来月、2級を受ける。

——とその時、俺の横にカラカラと鉛筆が転がってきた。

今時鉛筆なんて珍しいな。そう思いつつも俺はそれを拾った。

『元村 里紗』と丁寧に文字が書いてあった。

「それ……」

「え？」

俺が鉛筆から顔を上げると目の前にその鉛筆の持ち主、元村さんがいた。

「うわっ?!」

急いで驚いた。

「え?! あ、ごめん……」

「あ、ああ。これ、元村さんのか……。はい」

俺は彼女に鉛筆を返す。

「うん。ありがと」

俺は目線を彼女から問題集に向けて、勉強を再開した。やれやれ。やっと効果が出てる奴がいたか。さっきの元村さんの顔。かなり嫌そうな顔をしてたぜ。……たぶん。

放課後。俺はいつもさっさと帰っている。部活には所属していない。

春から初夏にかけての暖かい風が、下駄箱を出た、疲れた俺の身体を和らげる。

「はあーっ」

俺は大きく深呼吸をする。こうすると肺の奥まで新鮮な空気が行き届くようだ。

「元村さん……か」

俺は今日鉛筆を拾ってあげたクラスの女子の顔を思い出す。綺麗な子だったな。

「どうしたの？ 杉山君。私に用？」

「え……?!」

心臓が飛び上がるようだった。目の前には元村さんがいた。なんだか不審そうな顔をしている。

「あ……。ごめん。変なこと考えている最中だった？」

彼女は初っ端から訳の分からないことを言い出した。

「は、はあ？」

「あ、ちが……！ 考え事している最中だった？」

「あ……ええ」

なんだかギクシャクする。何故か久々に心臓がドキドキする。

「あのさ……さっきは、ありがとう」

「いや、いいよ。もうさっきお礼言ってもらったし」

「そ、そうだったね……」

俺達は目が合わせられないでいた。普通的女子とは違う。この娘は。そんな気がした。

「あのさ……。友達に……なつて欲しいんだけど……」

彼女は下を俯きながらそういった。

「ん？ 友達？」

「そう。友達」

意外だった。今までの女子はいきなり交際を申し込んでくる奴が大半だったからだ。それなのに元村さんは友達になろうと言ってくる。

「え……うん。いいよ」

「ありがとう」

なんだか、心が軽くなつていくようだった。

そうか、友達か……。それなら悪くはないな……。

二人の間に静かな、心地良い春の風が吹いていた。

前編（後書き）

ども、まなつかです。

さて、いかがでしたでしょうか。

なんかいいよーな雰囲気がしてますね。

短編小説なんで、展開は早めになっています。あしからず。

この作品は、友人に依頼されて、即日で作上げたものです。

「おい、まなつか」

「ああ？」

「お前、小説書いてこい」

「いいよ。ジャンルは？」

「スクールデイズみたいのじゃない、学園モノで」

「あいよ」

そんな感じで書きました。

軽いです。

次の日早速持つて行くと別の友人に取り上げられました。

そして読まれたあと、

「面白い。夏ノ風よりずっといい」

「ゑ…」

おい。

それで、後編はちょっと調整があるので遅れます。

結末が…。

（予定）通りになればいいですが…。

それでは、またノシ

追記：2010/12/03 文章を改稿しました。

後編（前書き）

前編の続きです。

後編

「おはよう。杉山君」

「え……。あ、ああ。おはよう」

次の日の朝教室に入ってくるなり元村さんは声を挨拶をしてきた。
「今日、私日直だから。宿題、早く出してね」

「お、おう……」

そんなギクシャクした会話をした。周りから見ればさぞかし不自然だっただろう。変態男子と純情女子だ。不釣り合いにも程がある。
案の定、山々が放課になってすぐに声をかけてきた。

「お、おまえ……。いつから元村さん攻略ルートに入ったんだ……
?!」

「なんだよ。攻略つて……」

こいつはやっぱり馬鹿だ。

「いや、急に話すようになったからさ。なにかあったのか？」

「ああ。昨日友達になってと言われたけど」

「……はあ」

山々はやれやれとでも言いたそうにため息をついた。こいつ、最近また振られたらしいな。ざまあ。

「おまえ、いいなあ。リア充死ね」

「ちよ、待て。俺はリア充じゃねえって！ 別に付き合ってないし
！」

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

「怖いって！ 怖いから……」

その放課中ずっと山々は呪詛の言葉を言い続けていた。おお、コワイ、コワイ。

そして放課後。

俺はとつとと家路に着こうとしていた。その時、後ろから声をか

けられた。

「杉山君！ 待って！」

「あれ？ 元村さん。どうしたの？」

「あの……。一緒に帰らない？」

「え？ 一緒に？」

なんでこうなるんだ。また山々に変に思われちまう。

「そう、一緒に」

彼女は顔を赤らめながら一言一言はつきりといった。

「なんで？」

「なんでって……。雨が……。振りそうだから」

「え？」

俺は空を見上げる。今まで気付かなかったが、厚い雲で覆われていた。今にも雨が降り出しそうだ。

「もしかして、傘ないの？」

「……うん」

今日は、運がいいことに折りたたみ傘が入っていた。俺はそれを取り出すと行こうか。と声をかけた。

肩を並べて道を歩く。

「あの……」

「うん？」

俺はいつもより近くに見える元村さんの顔にドキドキしていた。自分より少し背が小さい。

「雨、降り始めたよ」

「お、おう」

俺は慌ててカバンから折りたたみ傘を取り出し、さした。そのとたん、大粒の雨が降りだした。

「うわあ……。すごい降ってきたなあ」

「そ、そうだね……」

俺らはひとつの傘に二人入っている。密着状態だ。心臓がドキドキする。あっちにも音が届きそうだ。

「……」

どちらも何も言葉を発しない。ただ、雨が傘に当たる音と歩くたびに足元からぴちゃぴちゃと音がするだけだ。俺は傘をなるべく元村さんが入るようにした。自分が濡れても構わなかった。

そして、しばらく歩いた頃

「それでは、私ここなので」

一つの家の前で止まった。元村さんは傘から抜けて家の方へ向かって走っていった。

そして、軒下で

「ありがとう。杉山君」

と言い、手を振ってくれた。俺も振り返すにつこり笑って家のドアを開け、入っていった。

俺はしばし、立ち尽くしていた。

「さて、帰るか」

一言つぶやいて歩き出した。

空いている左側がやけに寂しく思えた。

そして、一週間が過ぎた。

俺はその一週間は普通に過ごし、勉強していた。元村さんとは、普通に友達として接していた。あの雨の日以来、何も起こっていない。

だけど、俺は知っている。

こんな平凡な日々も、どこかで壊れるのだと。

しかし、今日——こんなに早く壊れてしまうなんて思いもしなかった。

今日は晴れだった。

天気予報でも確実に晴れと言っていた。

俺はあの日以来、天気予報を必ず見ている。録画までしているほ

どだ。……山々には『おまえ、それ病氣』とか言われたが、天気予報は必ず見ていた。

なぜか——それは自分でもわからなかった。

そして、放課後。

俺はさっさと帰って勉強しようと思っていた矢先、元村さんがやってきた。

「あのさ、これから時間ある？」

彼女はそんなことを訪ねてきた。

「ああ、あるよ」

「じゃあ、今から屋上で」

「わかった」

そんなふうになんか軽く言ったが、心は雲に覆われたように複雑だった。

「よお、杉山。んー？　なんなんー？　死にてえみたいだな」

山々が殴りかかってきた。俺は軽くかわし、へへーんとばかりすると教室を飛び出して屋上へと向かった。

変わってしまう、俺らの関係が——

俺は上がる。階段を。一段一段踏みしめて上がっていく。そのたびに気分がウキウキする。

俺は屋上のドアの前で立ち止まる。一回呼吸を置いてから深呼吸をする。

「……もういいかな？」

俺はゆっくりとドアを開ける。ぎぎぎぎと錆び付いたドアが開く。杉山君？

ドアのちよつと行ったところで元村さんが立っていた。風によって肩まで伸びた髪がしなやかに揺れる。

「……」

俺はゆっくりと彼女の方へと向かう。

「元村さん。話って？」

俺は彼女に尋ねる。彼女は頬を赤らめながら――

「これっ！ 受け取って！」

彼女はいきなり手に持っていた箱を俺の方に差し出した。

「えっと――」

その箱をゆつくりと見る。アニメの絵柄が書いてあった。

「これは？」

俺は心臓がドキュリと嫌な音を立てているが、顔を上げて聞いた。
「杉山君、ギャルゲー好きって言うってたから……。その……、贈り物に……」

俺はなんて答えればいいのかわからなかった。

俺はあの時嘘をついた。女子を遠ざけるために。だけど、それでも俺のことを好きでいる人がいたんだ。

「でもさ――」

その時、彼女が口を開いた。目が合う。

「杉山君って、本当はギャルゲーなんてしないんでしょ？」

「え――？」

心臓がドキツとする。

「山々君から聞いたの。それに、そのゲーム新作だから普通だったらかかしら反応を示すはず……」

「……ごめん。俺、嘘ついてた」

「やっぱり。でもなんで？」

「女子が――苦手だったんだ」

「……聞きたいな。どうして？」

優しく、俺を包み込むように彼女は問いかけた。俺はずっと心のなかにしまっていた何かを言いたくなった。どうしてかはわからない。

「去年の夏だった――」

俺はフェンスにもたれかかりながらポツポツと話し始めた。

俺はある人が好きになった。その子はいつも、誰にでも優しい。俺は次第に惹かれていった。そして、話しかけていくようになった。

しかしある時彼女は俺に対してこう言った。

「ねえ……。私の事好きなら、やめてくれる？」

その一言で全てが終わった。

俺の世界が絶望に満ちた。バラ色の人生から転落して灰色の人生だ。

俺はそんな日々の中で毎日、何が悪かった。俺のどこが悪いんだと自分を責め続けた。

そして、夏が終わり10月。俺は思い切って自分を変えることにした。そう——変えるんだ。

まず、塾に入った。頭を良くすれば少しはマシだろう——と。

さらに、スポーツを始めた。サッカー、野球、バスケット……。

流石にこれは長続きしなかった。しかし、今でも筋トレはしている。

そして、最後に……。女子を遠ざけた。

何故か。それは簡単だ。俺の人生を灰色にしたのは全て女子だからだ。

この世の女を全て恨んだ。

一年生が終わる頃にはクラスの女子は誰も話しかけなくなっていた。別に寂しくも何もなかった。

俺は一気に語ると軽いため息を付いた。

「……はは。なんだかみつともないな」

自虐する。

「……そうだったんだ。——だけどさ。私には接してくれたじゃん」

「それは——」

「ここにだつて来てくれたでしょ？」

「……」

「あのね。私、杉山君のことが好き」

「え——？」

俺は今、「なんて……？」と訊こうとしたが、その瞬間彼女が俺を抱きしめてきた。手に持っていたギャルゲーの箱がバサリと落ちる。

「……好き……なんだ。これでも……私を……女子として……嫌うの？」

俺はそつと彼女を抱きしめる。

「違う。嫌ってなんかいない。出会ったあの日、友達になったじゃん」

俺は本心をそのままに言った。

「そっか……。そうだよ」

「だけどき、今はこうやってお互いを抱きしめている。これっとう……」

友達じゃない。

「好きだ。俺も、好きだよ」

恋人だ。

「俺は、もう……女子なんて嫌わない」

「どうしてそう思うの？」

「だって……。こんなに素敵だなんて思ってもなかったから」

「ダメ！」

「え！？」

彼女はそう叫ぶと俺を突き飛ばした。

「おいおいおいおい！？　いったい何が？！」

「浮気は許さない！」

「違うって！」

「……ふふっ。冗談」

彼女は笑顔でそうつぶやくと帰るね。と言って屋上を出て行った。俺は、今あったことが現実なのかそうでないのか……。そんなことをぼんやり考えながら立ち尽くしていた。

ただ……。これからは、今までとは変わった、楽しい人生になり

そうだな。

そんな期待に胸を踊らせているのもあった。

次の日

「すーぎーやーまーくーん」

「や、山々……」

「ぜーえんぶうー、聞いてたよ。見てたよ」

「ええ!？」

こいつ、ストーカーだったのか!？

「うふふふふふふふふふふふふふふ」

山々は気味悪い声をあげる。顔が見事にひきつっていた。

「ま、まて。そうやってその後ろに隠している鉄パイプで何をする気だ」

「死ね」

それで殴りかかってくる。

「うわっ!？」

俺はさらりと横に避ける。

「おのれえええええええ！　なんでっ！　（ガッ）お前が（カキーン）俺より先に（ガシャーン）付き合ってるんだよ!？」

「理不尽だー!」

俺は軽やかに攻撃をかわしつつ、笑いながら廊下を駆け回っていた。

ちらりと教室を見る。元村さんが笑いながらそれを見ていた。助けるよ。

「杉山アアアア!」

山々の本気の怒号と共に、俺らの笑い声も学校中に響きわたっているようだった。

後編（後書き）

こんにちは、まなつかです。

いや、無事完結できてよかったです。

これも周りの友人のおかげです。

そして、これを読んでもうみなさんにも感謝です。

さて、どうでしたか？

ハッピーエンドです。

しかし、なんかこれを友人に読ませた後

「お前、久しぶりに……いや、初めてまともなの書いたな」とか言われました。

(ア) アハハハノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ

笑い飛ばしました。鬱展開なしとかきつい。

イラストがものすごくつきたいですが、自分の絵はひどいものです。クラス的女子に上手い人がいるけど、協力してくれませんか。普通は。

後輩にも一人いますが、こっちもこっちです。

…諦めるか。

感想をいただくと、大変喜びますので、馬に餌をあげるような感覚で与えてみてくださいね。

それでは、また会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4683o/>

雨ノ日

2010年12月27日18時55分発行